

研究ノート

河野広中関係文書に見られる上海時代の北一輝の行動

—有賀文八郎からの書簡と電報を中心に—

クリストファー・W・A・スピルマン

北一輝に関しては、これまで数多くの研究がなされているが、依然として明らかにされていない側面も少なからず残されている。上海時代の北一輝の行動および人間関係もそのひとつであり、本稿では国立国会図書館憲政資料室所蔵の「河野広中関係文書」にある上海時代に北輝次郎が打った電報(＃一一一九)と同文書にある書翰や他の電報などを手掛かりとして、その問題を解明するための糸口を探りたい。

この電報は帝国政府電報局(Imperial Government Telegraph)の用紙に手書きのローマ字で書かれており、ローマ字の上のかな混じりの日本語が書き込まれている。電報の最後にローマ字で差出人KITTAとあり、宛先はAriga Bunpachiro, Harajuku, Tokio(有賀文八郎、原宿、東京)となっている。三通とも電報の原文(カタカナ)とそれを清書した写し(漢字とかな)が同封されているが、写しの初めには「宗教仁秘書某」「宗

は「宋」の誤字)とあり、最後に北の名前は書かれていない。これら三通の電報とその写しは一つの封筒に入っており、表の宛先は「貴族院議長公爵徳川家達殿」、裏には「アリガブンハチロウ」とある。切手が貼られ、消印の日付は明治四五(一九一二)年三月七日となっている。

これら三通の電報(＃一 明治四五(一九一二)年二月六日付、＃二 明治四五年二月十九日付、＃三 明治四五年三月一日付)は、福岡ユネスコ協会編「付録辛亥革命関係資料(書簡集・電文集・三井借款関係資料)」「九州文学論集四 日本近代と九州」、四六六～四六七頁(＃四一)、四六九～四七〇頁(＃四五)と四七一～四七二頁(＃四七)に掲載されている。またそのうちの一通(＃二 明治四五年二月一九日付)は、岡義武他編『小川平吉関係文書』(みすず書房、一九七三年)、下巻四四九頁にも写しとして掲載されている。ただしこれらの宛先は黒龍会の内田良平となっている。これらの電報の内容は、孫文と黄興に対して批判的であり、また日本のいわゆる「支那通」、つまり支那浪人(玄洋社の頭山満)、政治家(犬養毅)の態度、マスコミ等の中国論、日本の対支政策を厳しく批判しているが、これは『支那革命外史』でも展開されている北の持論とも言えるよう。

これらの電報がいかなる経緯で徳川公爵宛に送られるようになったのかは不明であるが、おそらく河野広中が徳川へ郵送し、

それが何らかの事情で返送されたものと思われる。有賀と河野広中の関係については、また後に触れることにして、ここではまず、なぜこの電報が北一輝と一般的には結びつかない有賀文八郎という人物に宛てて打電されたのかという謎を解いておきたい。以下では、電報の受取人である有賀文八郎を簡単に紹介した上で、彼が北一輝といかなる関係にあったのかを明らかにしていきたい。

有賀文八郎(阿馬土、アフマッド、慶応四(一八六八)年生)昭和二(一九四六)年没)は、福島県西白河郡東村字釜の小さな村で、下層武士の家庭の三人兄弟の末子として生まれた。^{註1}幼い頃から才能をあらわし、一六歳の若さで宇都宮の小学校の代用教員になり、二〇歳で小学校の校首(校長)となった。だが、学校経営に飽きたらず、教育の仕事を辞めて横浜へ行き、しばらくの間、英語に磨きをかけながら、外国人向けの書店や外人商館の通訳として働くとともに、日本写真界の草分けである小川一真の下で写真技術を習得した。明治二三(一八九〇)年には、外国人気象技師を案内し、日食観測に携わっている。また横浜在任中に榎本武揚や渋沢栄一と知り合い、渋沢の息子の一人(渋沢には何人かの息子がおり、その内の誰か定かではない)とも親しくなった。そして南進論者の一人である田口卯吉の『南洋経略論』の影響を受け、渋沢の息子の後援で、明治二四(一八九一)年に南海貿易を主たる事業とする恒信株式会社の設立

に加わった。その後パラオの支店に勤務し、日本からマッチ、ランプ、ビスケット、シャツ、米、メリケン粉等を輸出し、東京―パラオ間を往復した。

このような冒険心を備えていた有賀は、一所に留まらない性格であったようである。計画されていたパラオの開拓が本格的に始まる以前の明治二五(一八九二年)、有賀はすでに恒信株式会社を辞め、新しい冒険を追求し始めた。それは藍の貿易開発であった。そのためインドへ渡り、しばらくの間、貿易商としてボンベイに滞在し、日本のボンベイ貿易の先駆者となった。

帰国後、有賀はビジネスを関西へと広げ、大阪でセメント会社、石油会社、酸素会社、京都で織物会社など「当時としては時代の先端企業を設立し、経営した」。^{註2}明治三九(一九〇六)年には、当時日本で最大規模の発電所である宇治川発電株式会社^{註3}の設立に際し、創立委員会の常務委員の一人として参加した。また一時、有賀は出版業を営み、『日本紳士録』を企画し出版に携わったが、関東大震災の頃『日本紳士録』が大赤字を出し、有賀はその全責任を負って、出版業から手を引いたようである。このような一連の事業から窺えるように、有賀が歩んだ道は成功ばかりではなく、自ら企画した企業のほとんどにあまり長く留まらなかったようである。息子鉄太郎も、有賀の仕事には「成功よりも失敗の方が多かった」と回想している。^{註4}

だが、有賀のモットーである「七転八起」が示すように、本

人は失敗をあまり気にしていなかったようである。このようない進一退にもかかわらず、有賀は大正時代に千駄ヶ谷で六百坪の豪邸を構え、彼の回顧によれば五十万円に及ぶ財産を蓄えたが、関東大震災で被災した後、大阪へ引越し、昭和三年に還暦を迎えると実業界を引退している。もともと有賀は商売あるいは金儲けを、人生の第一の目的とはしていなかったようである。^{注6} 有賀の回顧によれば、彼は若い頃から宗教に興味を持ち、一時キリスト教の伝道師として活躍する程の熱心な信者であった。しかしボンベイ滞在中、インドに於ける回教の強さに驚き、結局、キリスト教を離れ回教に入信した。有賀の回教への傾倒は、精神的ないしは宗教的な動機によるものだけではなかったようだ。本人によれば、「私は一面に於いては青年時代から政治といふことに着眼したのである。それ故に、政治上から観ても、此の宗教を一日も早く日本に伝播する一の宗教団体を拵へて、而して日本の政策に適応させたいといふ考を起こした」と言う。^{注7} しかも有賀の政治思想は一種の汎アジア主義であり、常に有色人種の指導者としての日本の使命を意識していたことは、次の言葉からも明らかである。つまり有賀によれば、「支那に於けるイスラム教徒を全部一括して、日本の指導の下に動かせるならば、日本が支那を左右することは容易に出来ること」であり、「又中央亜細亜のイスラム教徒を我が方に引きつけて、彼等をしてソヴィエット露西亜に反抗せしめることも可能である。更

にアフガニスタン、イラン、トルコ、イラク、シリア等、斯様なソヴィエット露西亜に近き国々の信徒全休を日本が上手に指導して行くならば、日本が東洋に於ける覇者となることは、必ず疑ひを容れないところである。^{注8} これは日中戦争の最中の昭和一三（一九三八）年に書かれたものであるが、有賀のアジア解放への関心は、既に明治の末ないしは大正初期に形成されていたと思われる。そのような関心があったからこそ、有賀は大正三年（一九一四）年、新たに総理大臣に任命された大隈重信を訪ね、「日本の政策上、此の宗教を日本に於いて大いに宣伝せねばならぬ」ので、「内閣の機密費中差当たり十万円だけ投げ出して貰ひ度い」と働きかけたという。しかし現実的な大隈は、この申し出をきっぱりと断り、有賀の提案は受け入れられなかった。^{注9}

有賀の中国革命へのかかわりも、このような汎アジア主義的な意識の表れであると思われる。ただし下記に紹介する河野広中宛の書翰で、有賀は回教について一切触れていない。有賀は隠退した後も、回教の布教活動に専念した。昭和一〇年に神戸、昭和一三年に東京にモスクが出来たのは、有賀によるところが大きい。有賀は回教徒の大アジア主義にも努力し、例えば、亡命中のオスマン・トルコ皇帝の皇太子アブドル・カリムが日本を訪問した際、森恪と実川時次郎と協力しながら、彼の世話をした。また日本在住のソ連領中央アジア民族バシキル族（トル

コ系回教徒)の代表クルバンガリとも昵懇の仲であった(正しくはクルバンアリであるらしいが、本人はクルバンガリの他にロシア風にクルバンガリエフと名乗り、昭和初期前後、『大東文化』等に評論を連載した汎アジア主義者であった)。有賀の回教伝道の努力の形跡は、昭和一三(一九三八年)年に高橋五郎と共訳で出版したイスラム教典コーランの訳『聖香蘭経』にも見られる。それは、日本で二番目のコーランの和訳であった。^{注10}

昭和一五年に岩波書店から出版された笠間梈雄著『回教徒』という入門書で、有賀は比較的詳しく紹介されている。笠間によれば、有賀は「日本人の回教徒の長老」であり、明治二九(一八九六)年に神戸で「インド人の教徒から、入信式を行ってもらひ、多数の弟子を持ち、熱心に傳道してゐる」という。なお、その記述によれば、有賀は一風変わった回教徒であったという。すなわち、有賀の思想の基礎には「愛国精神」があり、「戒律等は必ずしもアラビヤ人やトルコ人の奉ずるものに盲従しないのである。」^{注11} 経文も、祈祷も日本語で行い、「皇室を尊敬し、父母兄弟同胞の相愛を説き日本精神を中心にした進歩的回教を説くのである。」^{注12} 入信の儀式としても、割礼を行わなかったようである。このように有賀は、回教徒である前に日本の愛国主義者であり国家主義者であった。アジアの回教徒を日本のために利用すること、言い換えれば、日本の国益を南アジア、南西アジアおよび中近東に拡大することが、有賀がイスラムに入信した最

大の動機であったと結論しても間違ひではないであろう。^{注11}

CIAの前身である戦略事務局調査分析部が作成した報告書「ロシア及びその国境地域在住の回教徒への日本の浸透作戦」も、笠間の書物に基づいて同じ結論に到達している。すなわち有賀の入信の動機は、イスラムを「日本のために奉公する」とに^{注12} あったという。同報告書にも、河野広中の名前が見られ、回教徒の良き理解者として位置づけられている。^{注13} 残念ながら、河野の回教への関心が有賀の影響によるものであったかどうかを判断できるような資料は見当たらない。また、北の回教徒への関心やイスラムについての知識が、有賀からの影響によるものであったか否かを断定できる資料もない。常に多くの本を読み、博学的な知識をもっていた北が、イスラムに関する書物を全く読まなかったとは思われない(当時、満川亀太郎、大川周明も回教に関心を示しており、イスラムに関する造詣があったが、彼らが有賀に接した形跡はない)^{注14}。とはいえ、イスラム研究者の四戸氏は北のイスラムについての知識を高く評価し、それが有賀の影響によるものと推測しており、有賀の影響が全くなかったと言いつてもできない。

さて有賀と北との接点は、やはり有賀のアジア解放への関心によるものであった。小村によれば、有賀は明治四四(一九一一)年前後、中国革命運動に興味を覚え、革命の為に募金運動をしたり、保有していた宇治川電発の株まで売って、革命資金とし

て投じたという。その資金を孫文に渡すために有賀は中国に渡ったと小村は伝えている。小村によれば、「有賀は宇治川の株を売って孫文救助のための革命完遂の軍資金に充当すべく揚子江を逆航して革命発祥の地武昌へ急行し」、現地で宋教仁と宋教仁の「秘書」である北輝次郎に会った^{註15}と言う。小村のこの記述は以下の資料によって裏付けられる。「河野広中関係文書」には次のような河野宛の有賀書翰（#二〇七）がある。

拝啓

御地出立前ハ屢々御邪魔仕失礼御高免奉願候。扱テ小生儀去月廿四日御地ヲ出発致シ、廿五日神戸ヨリ乗船、門司、長崎ヲ経テ廿九日朝当地へ着致候。当時宋教仁ダケ当地ニ在リテ万事ヲ總理致居候ヘシガ、黄興ハ昨日当地へ帰着致候。溝口ト咸陽ハ既ニ官軍ニ取ラレ候ヘ共武昌ハ未ダ落ルニ至ラズ。南京ハ近日中ニ陥落スルナラントノ事、南京陥落セバ革軍ノ天下ハ万歳ナルベシ。支那十八省中ノ十六省ハ既ニ革軍ニ組シ居ル訳ニ候処、溝口方面悉ク陥落スルモ、南京ヲ攻落セバ、革軍ノ勢力ヲ維持シ得ル事必然ノ事ニ有之候。宋教仁ハ總理大臣ニ定マリ申候。宋教仁ヲ助ケテ万事ヲ^不エシ^明居ルハ北輝次郎氏ニ有之候。全氏ハ若年ニハ候ヘ共学才アリテ有為ノ人物ニ有之候。然シ世ニ經驗

乏シク、胆識ノ見ルベキナシ。然シ宋氏ハ強ク彼レヲ信賴致居候。依テ昨日北氏ニ閣下ヲ総顧問トシテ招聘スベシト談ジタルニ、手ヲ拍テ喜ビ、若シ応ジ玉ハレ候ハ、礼ヲ厚フシテ御迎ヒ申ベシ、何レ明日ハ宋氏ト鼎座協議ヲ遂ゲ、確定スル様致スベシ、御迎ヒ申サン時ニハ、小生ニ宋氏ノ秘書官ヲ附シテ、日本ヘ到ラシムベシトノ事故ニ、小生ハ近日中ニ一旦帰朝致、閣下ヲ御迎ヒ申上順序ニ相成ルベクト奉存候。黄興ハ何レ大統領ト相成可申、一週間内ニハ各大臣ヲ任命シ、列国ニ向テ革軍政府ノ主義ヲ発表スル由ニ有之候。国家ノ為メ御自愛專一ニ奉祈候。勿々敬具

十二月三日

河野広中殿閣下

有賀文八郎拜

この書翰が示すように、有賀は革命から間もない中国に渡り、黒龍会の内田良平の要請で革命の視察のために一足早く中国へ派遣されていた北輝次郎と会い、宋教仁らの中国の革命家とも接触した。^{註16}若いわりには知識と才能があり、経験は浅いが、宋教仁も信賴している北は、河野と宋教仁の間を取り持つパイプ役を果たせるであろうと有賀は書いており、その関係から有賀・河野宛の上記の電報が送られたと思われる。

河野広中（嘉永二（一八四九）年—大正一二（一九二三）年）は

著名な自由民権運動家、政党政治家であった。当時すでに六〇歳で在野にいたが、なかなかの野心家で政治への関わりが強く、大正四（一九一五）年の第二次大隈内閣の農商務相に任命された。また、河野は外交問題にも強い関心を持ち、どちらかという、強硬派に属していた。さらに対露同志会等の会員でもあり、日比谷焼討事件で入獄した経歴の持ち主であった。^{注17}

だが、辛亥革命をめぐる河野の動きはほとんど知られていない。河野の代表的な伝記である『河野磐洲伝』にも、辛亥革命に関する詳しい記述もなければ、有賀の名前も出てこない。しかしこの書翰が示すように、有賀は独自に、あるいは河野の同意を得て（後者の可能性が高い）河野を辛亥革命の「総顧問」に据えたかったようであり、北もその考えを支持していたように思われる。明治四四（一九一一）年二月三日に有賀が上海から河野宛に出した電報のなかで「オイデネガフコトキメタ オムカイニイク、アリガ」（おいで願う事決めた お迎いに行く、有賀）と知らせ、^{注18}八日付上海発の電報では「オムカイニイク、ゴシヨウダクマツ」（お迎いに行く、ご承諾待つ）と念を押した。ところが、河野は躊躇らっていたためか、「フザイオク レタ イマカンガイチュウ」（不在で）遅れた。今考え中）という返事を出している。その後、有賀は河野に会うべく、長崎門司経由で、一月一六日に東京へ帰っている（長崎や門司発の短い電報がある）。また、同じく「河野広中関係文書」にある

河野広中日誌には、この後來客として有賀の名前が二回ほど出ているが、残念ながら話の内容は記されていない。^{注19}しかし、河野を「支那革命総顧問」として迎える有賀の計画は、実現されなかったようである。その前後に河野が中国を旅行した形跡もない。有賀と河野の関係はいつ始まったのか定かではないが、接点としては二人が福島の出身であることが考えられる。また例えば亜細亜義会という組織（河野日誌によれば、この組織の会合に河野は頻繁に出席していた）の可能性もあるが、現時点では確定出来ない。

この北の電報が明らかにしているのは次の点である。北輝次郎は彼を黒龍会の代表として上海に送った内田良平宛だけでなく、他の人（有賀文八郎）にも電報を打ち、情報を流していたという^{注20}ことである。有賀の河野広中宛の電報や書翰を見る限り、北と黒龍会の関係に関する記述がないので、おそらく北は有賀との話しでは黒龍会には触れず、自分と宋教仁との親密さと自分の独立した立場を強調したと思われる。昭和初期、北は三井の池田成彬らに情報を売ったと言われているが、有賀とのやりとりを見る限り、北に金銭的な動機があったかどうかは、断定出来ない。しかし既にかなり早い段階、つまり明治四五（一九一二）年頃に、様々な方面（この場合有賀・河野）に北が情報を流していたことは明らかである。

注1 ここでは特に断らない限り、有賀に関する情報は小村不二夫『日本イス

ラーム史』、日本イスラーム友好連盟（一九八三年）、一五〇―一六六頁による。また令息である有賀鉄太郎が著した「一つの回想―父と私―」『同志社時報』一五号、一九六五年、五四―五七頁も参照した。四戸潤弥「アブマド有賀文八郎（阿馬士）―日本におけるイスラーム法学の先駆者としての位置づけ―」『宗教研究』七八号（通号三四一）、二〇〇四年九月、五一七―五三九頁、四戸潤弥「北一輝のイスラーム理解と日本人ムスリムの交友」『季刊アラブ』、二〇〇四年秋、一四―一七頁も参考にした。なお『朝日人物辞典』（現代日本編、一九九〇年出版）に有賀文八郎（あるがふみはちろう）の見出しで有賀が簡単に紹介されているが、その内容はあまり具体的ではなく、日本の回教徒の先駆者でありイスラーム伝道活動に専念したという点が強調され、「日本におけるイスラーム教信者の草分け的存在」として位置づけられている。「あるがふみはちろう」は単なる読み間違いだと思われる。最後にこの研究ノートを作成するにあたり、伊藤隆氏、小林道彦氏、小宮一夫氏、ジェミール・エーディン氏にお世話になった。心から感謝する。

注2 小村、前掲書、一五六頁。

注3 林安繁『宇治電之回顧』昭和一七（一九四二年）、三八―四一頁、また

三三頁に続く写真及び説明を参照。

注4 有賀鉄太郎、五五頁。

注5 有賀文八郎「イスラーム教とは如何なるものか」『創造』昭和一三（一九三八）年一〇月号、一六六頁を参照。大正四く六（一九一五―一九一七）年の『日本紳士録』に、有賀文八郎という名前が載っており、その住所は豊多摩郡千駄ヶ谷町原宿一四五となっている。職業は出版業とある。ちなみに大正一〇（一九二二）年の『日本紳士録』にも有賀文八郎は載っているが、住所は日本橋大伝場塩町とあり、職業は日本共通証券（株）取締役、大正酸素監査役となっている。

注6 有賀鉄太郎は「父が根っからの経済人ではなかった」と指摘している。前掲書、五五頁参照。

注7 有賀文八郎、前掲書、一六六頁参照。

注8 有賀、一六七頁参照。

注9 有賀、一六六頁を参照。筆者が調べた限りでは、大隈重信文書にその形跡はない。

注10 最初の和訳は大正九（一九二〇）年の坂本健一訳であり、大川周明の翻訳はその後昭和二五（一九五〇）年に出され、三番目の和訳であるが、三訳ともアラビア語の原典からの訳ではなかった。

注11 笠間泉雄『回教徒』岩波新書、一九三九年、一一二―一一三頁を参照。

注12 Office of Strategic Studies, Research and Analysis Branch, "Japanese Efforts at Infiltration Among Muslims in Russia and Her Borderlands," 一九四四年八月 (R&A, No.890) 二六四頁を参照。

注13 同報告書、三二頁及び三八頁を参照。

注14 すでに明治四三年に大川は「神秘的マホメット教」という論文を（宗教家の松村介石が発行していた）『道』に掲載していた。大塚健洋『大川周明と近代日本』木鐸社、一九九〇年、七〇頁を参照。

注15 小村、前掲書、一五六―一五七頁を参照。

注16 なお、この書簡と細かいところまで一致する内容の記述は有賀鉄太郎の回想にも見える。有賀鉄太郎は、文八郎が遺した文書（日記、ノート）を参考にして父のことを書いたと思われるが、この有賀の文書が保存され一般に公開されれば、貴重な資料となるであろう。

注17 『河野磐洲伝』、大正十二（一九二三）年、六一八―六二〇頁を参照。

注18 『河野広中関係文書』#二〇七を参照。以下の電報も同様。

注19 『河野広中関係文書』#五三三、日誌、第二一冊、明治四四（一九二二）年二月二一日と明治四五（一九二二）年一月四日を参照。

注20 当時、黒龍会の内田と北との関係は比較的良好であったようである。し

かし後に北は黒龍会を罵るようになった。北は「猶存社が評判の悪い黒龍会と同類に思はれる」と、それが猶存社にとって「不利」になると主張し、そのため、満川が黒龍会発行の雑誌の編集長となることに反対したようである。一九二一年三月十一日付の満川亀太郎宛大川周明書簡（満川亀太郎関係文書）を参照。